玉燕小摘

一二

源氏物語玉の小櫛二の巻

たまかづらむ

物のあはれをしるといふは、まづ手をうちてあはれといふ事を見るものきく物ふる事にんの感じて出る歎息（ナゲキ）をもふて今乃俗（ヨノ）言（コトバ）にもあはれといひ、なげきといふそれしるべき人ぞ月花をみて感じて、あはれ花ぞやなどよい月花をあはれといふ、このあはれとなるべきものなりしる物ふる漢文ゝ嗚呼などいふもをあはれとよむなることしたがふ。あはれ文あやなどいふもあはれ。又なやましきといへるもかのなげきをはじ。又後の言ふ。あはれなるといふ。あはれとかれ感ずる泪をほどこしまた後の

世ゝハ何ものたもゝ成者使ものとゝいへゞとも、たゝをべてやう
のゝ事ゝもみな、おれ者のまゝ、ふたりゝハ、葉歯などのやゝ、ゝ枯へ
しわり、結ふ此わをゝいふゝハ、強く、ゝ、ふて、あゝゝをゝ、ゝ乃
主ゝ、ゝるゝれをさゝ、し、古侍指をふ、あゝれを言天晴也（ふり）ゝいへ
ゝれ、いゝゝき、ゝ、ゝて、ゝ、ゝ、ゝれ、ゝて、ゝ、ゝを晴乃ゝ
ゝゝれへゝゝ成ゝるべゝ、ゝ、ゝて、ゝ、ゝへの、ゝに、あゝゝとゝ、ゝ、ゝハ、
ゝ、ゝ、松あゝ、何ゝ、ゝ、ゝの、ゝ、ゝ、ゝ

ぞ行くもとと感ずべきすがらなれば、その感ずべきこころばえを
ときあへりて感ずるを、おろかなるといふべし。又和をなるといふべく
いふ云ふ。もと行くなとと感ずることし。古今序に霞をあられび
くなる雪などをもてるなり。又後の号うは、あるとといふう。哀の字を
もて、ふぐ悲哀のことのそらふ色もとなど、なるとは悲哀ふうぎしび。う
ちにふる。おもしろきふる。ふのしきふと。をうにて。をうも。をべて行くを
もとふうう。いみるあをもしけもバなるれふおうくうもとなるれふうも
しくうもとは。ふくなていつる。そをおうきふるうきふるうきふいもれく
感じるを行くもふといつるし。但し又おうきうるきはぐおるも
くもと。對へくいつるもくも多くるは。人の情乃ちまぐふ感ぞる中ふられ

ちきくおもうきすがらふを感ずること。ふうくかるきすうき
て。ふうきちくなど。ちべくふふふふふをぬちちふを感ずることちよあ
く。ふきうぐ。るるがふふちふきをうわきてもなるもとといるなり。
俗う悲哀をのといふと。うのふなへし。るるへを花葉。花に梅の色を。
花乃さかりふるべてえなやといいることなるがぐ。梅の花と花
なるもどる。そもふむへても。梅をうるうて花といるうて又物う感
ぐとは。俗ふはぐよるるふのといふめもどもこもものべ。字書う
も。感は動也といひくふのうぐこと物もバよきすふれるすぬ
ちもふの詠きて行くもとふるくは。みる感ぞる色。あるもくふ何
ふくなるもぐし。漢文ふ感鬼神とるて。古今集の詞書ふ

も。総書とも云。又序ふ。おふ部をもいふなり。品位とかくも
しるふて。ものゝ品ハ。物に感ずる心。物をもるべし。大ぶ。ものゝ品といふ
云ふ也。又うつりてたゝひしるやうなど。上件のしんぢ。かくて
又物のゝ品といふも。同じことなり。物といふも。詩を物いふかゝるを物体。
又物ゝ。で物に物に物ゝ。物どいふ。ゝるびの物也。ゝゝいふゝに所ふ。ゝ
でなる。ゝゝ人ゝ。何ゝふまれ。感ずべきゝに。ゝゝて。感ずべきこゝ
ろをもつて。感ずる。ものゝ。ゝゝ物をもるゝハいふを。かゝゝ。感ずべ
き事ふゝとても。ゝゝでゝ。感ずること。物きを。物のあゝ。ゝゝ。
いひゝなき人とハいふも。ものゝ。ゝに。ゝ人ゝ。感ずべきゝ。
ふゝおのづゝ感ずハえゝ。ゝゝぬゝ。ゝゝ。何ゝ

を。おもひ。ゝかゝなゝて。かゝゝ。感ずべきこゝ。物をもゝ。物で
ぞゝ。後撰集ふゝ。ゝゝふて。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。物ゝ。
物ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

まげおかや家の[illegible]おもしろく[illegible]でさく[illegible]きすがちぎり
をうけ又春夏秋冬をりく[illegible]めに花月雪[illegible]とぶひをおりきさ
まふ出わしはせるかどこゝとゝみ人のんをうどかし[illegible]ものをもしく[illegible]ものをも
掛ふてゝふ[illegible]ふるすゝるゝ時ゝ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]家[illegible]ものを
ものゝをくさくもしくゝるゝるざし相つゞの[illegible]ふゝ[illegible]風の[illegible]むしゝ[illegible]
孫[illegible]ゝたきてゝ掛のゝかゝ[illegible]ゝうおゞ[illegible]ふ[illegible]帝[illegible]何人[illegible]きゝ[illegible]
の家ゝきもゝゞる人ゝゝえんふもゝゞゝもゝ[illegible]ものゝ[illegible]葵
[illegible]ゝゞゝをゝ[illegible]ゝ人の[illegible]ゝゝゞ今乃[illegible]
ゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

なく、さくふ人くもと、えのもとゝび、夕うれはもゝ云、まゝてさうぬべきつ
いでのはゝそのなかもなつゝ紀はゝまゝきをえんする人のさゝゝ和乃ん
をゝひるハいぐハおろふゝひ笑、ゝ、ふ笑ゝ、笑ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
はゝなゝうゝちふ、ゝ浮ひもの、ぐれぢやきゝん、又、ゝ海破のかぐやき
出るはゝかゝ、竟はゝまゝきゝ、ゝ、ゝとがやゝるふ、又、和ゝんゝる海ど
きゝ下人ゝどゝ、ゝゝゝ和乃ゝ浮ゝるハ、濃ふゝ、ゝ名、浜鹿ゝ云、
ゝゝゝゝ月、ゝゝゝゝふゝゝぐ和ゝ名ゝゝきゝゝゝて、和をおぐゝゝ
ふゝゝ、ゝゝふゝゝゝぶふもなきぬべゝ、夕青ゝ云、ゝゝ名でゝゝき
ゝゝふ、ゝぐゝゝて移びゝゝゝを結ゝはゝうゝ和めゝゝるゝ和ゝゝ紀お
ゝゝゝゝふゝゝゝ人のもぐゝべきゝゝもゝ結ゝぐゝおふ弥ゝはゝゝゝ

つゝくゝゝ、浦毋、ゝ云、ゝゝゝ紀わゝをおふゝはゝうゝゝをゝゝおゝう
ふゝゝゝまぐ紀人のはゝゝまゝうゝ和ゝぐゝゝ浜ふべゝ人のゝゝゝはゝ
ゝゝゝ感ゝるゝゝゝきハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふ感ゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝふへゝゝひはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おのゝゝゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝひて思ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふ感ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

んわるかぎり皆ちきふろとていふこうまさるべき感ぜべきうずるもをや
をといつそうるをふみる法し物こ風んわるかぎわ〳〵いつるハかく感ぜ居
きこゝをとりいつそんてもんう〳〵相のいつゝ絵をもつみ人を行ゝもを
うぞ感ぜるこゝ和きし上ふ〳〵出うる者くふうゝもあ〳〵んをおもひを
ゑを和ぞいつゝをもおりひわをもべし〳〵まてもあ〳〵いつゝを風をうゝを
あ〳〵きこゝふ〳〵うるハ相蟲を云風ゆ者虫ゆのふつけても相のを
ゑ和〳〵おぞうゝふ弘徽殿りハ人〳〵うゝんのけつぐのあもまうの
ぞり絵いぞ月のおも〳〵ろきふ愛ふるまで和をびをぞ〳〵絵ふる
いゝおし〳〵うちかぞ〳〵ちきうゝ風あ〳〵めふけ方をてうずふもわ
うぞおぞ〳〵きうて物ふるべし此ぞうのけまし紀を

えをまうゝ人女房ぞハうゝいゝ〳〵〳〵笠童
和のいつをまぞうゝ女人のやゝかぞをうる寿ハ風のおく虫の音あり
ものをかすゝくおぞ〳〵ををてうゝをんあゝむ人を月沢おも〳〵
〳〵ハえ絵ひをんやをうてけわをびぞをもひうんやをべゝ
月ハうる人うゝえんふもをぞ〳〵をゝいつぞ〳〵おうふうゝふ月乃
おも〳〵ろきをゝハうきでんのけんををてをるもおうをもうぞおぞ
〳〵きうてゝハ寿ゆうゑ〳〵絵ふをうずゝをも〳〵絵ハなしけぞうゝ乃
けをまし紀ゝハみうぞゆうゝをのふをき〳〵きぞいつを
柳を云院のおゝ〳〵まいつる学をゝをぞうゝを絵ひつを后のけんいつゝ
をやくてかゝぐ〳〵おぞ〳〵つうゝるゝぐものむくいをむゝおぞをべう

名ゆゑ又老たてをもるまゝふさがれさるもきくりて強もくらべる
しくゝ思へばくゝぞ思ひきこえさせゆひるゝけるもこれでんの大后の
ゆるしにはをふ源氏君〳〵幾月程君しめるべし此大后又父太政乃い
そゝけうゝくの御つそろふ父太政ゆるいときふふさがれ
くおそゝまゝいひ多れがゝもさづゝとおぼそゝむゝさがり
の人をおぼゝそぐべきぞうゝけるとぐいきふのぐえるそろお
をせたおそぐのおぼゝもまゝくびありてゝいひやひのまゝふこえる
所おををぬ本上ふいゝぐおいのれおぼをまゝそひまひよゝれバを又ま
本程をを云什大わるぞさがるものゝりる下ゆ事をを云大小方くい
ふさがれものゝこゝまゝハ紫上のまゝ物のゝすしをゝ什御後のわる

やう源氏君ハ不義のゝすをバおきてさゝとけうきまゝりいそぐぐ源
氏君のゝをまゝふんよかゝぐけうゝけうまる人をバまる御のけうれを
らぐけうゝき人ゝゝしるゝ上の件のぐゝそハ源氏君をもゝけうを
ちかハよき人ゝもるがなもゝよゝ付後のゝゝ儒のそれぐ乃
ゝ後ぐへをもていをもむりハ藁つぐの中ゆゝとゝそハ弘徽殿大后
ゆるもけうき人よりふべきぐをバよふをゝぐゝよゝ人のけんふ
ひゝゝ不義をゝハおゝゝまをぬゝきでんぐゝをゝかゝいみゝゝくお
しき人ふいるハ御後を御のわををるかゝぐむゝりゝて
ゝゝもれぐぞゝゝ夕雲君ゝゝ雲ぬの后君ゝのすを雲后君ゝの父
大后はきびゝくせいゝいさん結ゝゝまゝぐおまりんきゝのやう

ふいしゝ。久雪天雪雪雪天雪とだ。うゝきさゑゆいそぐる。こまとえさよ
のつゝの海をゝば父母のつゝえハさるべきうゆて。久雪天雪雪雪雪
雪とハ飛わるをや。たべゝ畑のわゝをもるゝとたゝぐるゝともて。よきき
わゝきゆゝとゝるおもむき。たゝゝをよゝゝて。おのづゝゝもはるべきこゝとハ
よゝたまハゝゝゝゝゝゝゝゝふたゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちまたに、ちひさくんづよくいうまとつぬものふたりておこうふさこ、
又人をもくえみちびくふも、些事はものいうを花を思ひんよりて
ゑ稲しがくそいちばわをもちぬやうおもでぎきよの雪ふよ
どりむことおもをそはをくへをばそをとりいへだまてはは
のあをれを源くをるし儒のをくへをんだくをはどうをぞう
し椎が年をふ阿署梨のあまりさうに紀むどをんをふをつくし
くなんあがくるくいうこと字治の八宗はうを治ゑをどそ乃
姫をくちはいみしくかくしくおがきふ阿闍梨の佛のをこの
をうはもて執着はんををはをを志光むをて親をはわはをを人
をうばつをはきをふはをんづよくふをつ

らくとあがきるあて、わくしの稲のいはををぬといふはたくをかやうはる
ゑし又むどをごろはる偽ゑ世中はるふうをれ稲をばまをふ
をくぬうをもをべきしまをて又をべく稲のいはををりがはをはをり
て、はををはをんををくをるをばいくいはきあくくしをと、をふ
るがひゑまをふあをれををるふをいはをでうをべのはをろひを
ゑをいをくうをれをるがはをばしゑ年末をを云をべて男も女も乃
ものゑ和づふをまをるかをはるををのをり和くんせつくをむくを
をををいをわくをを、ゑはるふ和どをはさくをくあがゑるを
をかをうをを、ゑひをうぬをりはんをはよくばををををがさ
をむをんはやをうをべきをべくんをりをををむををををを

がゝみもてなし。いとなゝめかしくむつかしきを。一つ二つのふしゝはるもそべ
くはむもあべりきる。胡蝶、春を云。そべ〳〵女の。袖づゝきぞ。んのやうか
袖乃つゝきもちわがかたらひおりきるをしえちるむ。そのつゝと
ゞ。つゞきおるべきぞえ〳〵。おぐいつゝきし。うち本結の女のやうふあぐ
ゝる人り。些ゝなどひおゝし。ものてきぐつよりぐむおりをぐ
ゝ。ぐしいつゝ〳〵ぐひを。うハべをはらひて。えせむとゝるものゝ。ゝて又
袖のあつゝぞぞちりゝとを〳〵いつゝをだ〳〵きるゝに〳〵るもものゝ
ゝ。ぞぞちるゝこの涼おをゝるゝりゝいつゝふハゝ〳〵ゝ。ゝとハゝ〳〵もあ
ゝ。ぐぞちるゝおもゝよゝりゝ〳〵ふあつゝ〳〵ぞぞおゝる物るまひのゝて。
いつゝ。ハ人ゝもなびきやゝちふ。ぐゝおゝるゝぐゝといつふし。ゝゝ〳〵バゝきゝ

ぐふゝ〳〵いつゝる。ちりぐゝおゝるゝぞぞゝ。ゝゝて〳〵いつゝ。ゝて。涼〳〵ゝ
ゝ。ぞぞゝ。ゝゝ〳〵ゝゝ。ゝゝ〳〵〳〵。落ゝ。ゝ云。女ゝハ。秋のいつゝ。袴を〳〵
ゝ。ぐゝおゝ〳〵ゝ。ゝて。ゝるゝ。ゝゝ〳〵〳〵。ゝゝ〳〵〳〵。

女はゝ。秋好中宮。ゝゝハゝ。ゝ〳〵。秋ゝハ〳〵ぐゝふゝんゝせ〳〵ゝふゝ。
源氏。春のゝひ。ゝゝ。ゝゝふゝ。ゝふゝ〳〵ゝ。ゝゝ〳〵ゝふゝ。ゝゝ〳〵。

久ゝ。ゝ。ゝ〳〵ゝ。ゝゝゝ

ふことをぶ。そぢゆう。紫上の御し。
浮法を云うへ。そばんのうちゆふおぼ〜えんぐ〜きて〜おやうれど。さ
かしげふなるゝむ法ゆぐ。のるひいづるもゝとなり。
こゑも同じうへの。ひがれうん後そ。うか〜おぐいふことをけう〜ぎ
ゆるゝ〜して。そぢ法ゆるなると。
うゑ〜ゆ。ゆふべ〜。女そよ。人そ。かぐりみゝことぶふ。そづう〜お
ぐ〜うる。ゆて。ゆうれうがゆをけうて。うをむとゆるをやか
〜て。女の中ふよ。ゆ。ゆえ〜ふいゆる。此紫上乃んぐへを考ふる。蛍
ゆを。法拙後のゆ。ゆいるそうふいゆ。〜。うへんゆうぐまゆる人ま絲
ぐとハ。ゆるゆふかゝ〜いゝ〜てそ。

うへそ紫上。そ。〜。ゆふ御し。人ゆ。ゆとハ。拙後ぐとのうし。ゆふ
人のうへを。ゆ絲びて。ゆるゆふいゆ。ん後きハ。ゆぐ〜ゆき女のゆうり
ゆうる。ゆて。ゆ。ゆ。ゆ

つまて、ちゝ母花を餞情ふ、要をつゝて、ちゝ〜絶へ、ちゝ〜絶すハ、ふ、和
俗をゑて、ちゝ〜べし、此人々がのん儀を聞くと、いつもと、ちゝ〜ゝ人まて、多
くは人々乃まさう況、まつ、ものを、ちゝ〜ゝ、ちゝ〜ゝ
恨みて、死るなぐもを、有し、かゞ、いつゝ〜かと、ゆ、ものと、思ひぐわし
人まり、やうは、ゆゝ、よ、つゝの儒者ぶの、俗ゝて、ハ、貞烈しや、
ほむべきまゝ、ゆ、況、一偏(ヒトヤウ)、こゝ、いつり、未婚も、ものを、ふ、ものを、ぶ、く、んぶ
よ、ものゝ、ゝ、ゝ、ゝ人、ゝ、ゝ、ものゝ、ものを、ゝ、ゝ、まめやゝ、ものゝ、ものゝ、和
のやゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
かゝて、仕業、上の、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
人、も、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、

ぶ、ふ、かゝ、人、ぬ、や、
ゝ、ゝ、ゝ、

〜ぞと。おやの。そそぐ〜へ。おりしやらて。こそ。いとくちをしく。
おらまつるこそ。おかるるとハ。佐藤藝ぢ。ほどふるこそ。べきなれど。上の物
のわそれ。ちかぬこのつき。ぢをば。あのつくるを。ぢ。をこそ。おらまつる
ぬ。ぢ。むと〜ていつる。ぢ。ふ。ぢ。夕雲。を。の。ぢ。まて。も。をるべし。
ぎふさいへど。その人のきりひよく。ぢてしるハ。ひわり。おもぶ〜しかし。
ぎふさいへど。こそ〜ハ。俗云ふ。なるうどどでも。そ人のむをめほぜ
ぢりて。こいふ。こそ。がひ。ぢ。ハ。親の。ぢ。ぢ。ぢて。おり〜。こそ。ぢ。ひの。を
ぢりおもぶ〜ハ。親の面目ぢる。
夕雲。を。ふ。夕雲。大ぢ〜。女二。を。この。ぢ。ぢ。ぢ。ぢて。源氏。を。の。紫。
上ふ。ぢ。なり〜む。後り。ハ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。

の〜ぢへる。ぢ。ふ。紫。上の。ぢ。ひ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ。ぢ

あのさちふかくれるをわるもの、弱りてそのまゝびえも拵ぢうあ
ちるとがかたくなりあのわるものもちりぢそといふうふおちむてをさた
ばりつゝむかぐふえうつゝなびきわりてもおちゝなまふあびこゝそし
そぐをあふいゝぐんのうちふむをぢまてしうをもいはきこうまぞこ
の弟をもて好そてのそろきゝはりるさてはやう
ゆてハ行ふつきてうハ学ふゆるゝゝゝもはうん又ふあゝはけ
てうハつもゝゝそもおぐさめひともさてはけあき学ゝもいへ
ゆを学を考おゝていゝふどもはうゝゝ今はちどおるふ人のおぐ
さむるぞたゝてハうちをゝかべゝゝのをあているおるべゝ始ゝ
ざどバつゝあきゝいふゝふゝゝゝしさて和のあるとゝ歌りてえ

さゝいふを未拾遺巻云さやうおるをゆひをる人を和ゝひゝと
ゝる家ゝしたをおき本巻京のをきふつけてもをるをおゝを
ぐてんだせおゝえうゝ歌ゝをりゝはうむてをはりをある
べりをゝとはうるやうふものはりを好る時を本巻おぐふよをて京
ふもようをゝふもをて和るゝゝゝぐひをて人のはりを続を人よ
えをて好ぐさむるゝ又巻生巻云和ぐゝこのをゝかゝゝゝど
おのづゝゝいをぐをて好きほぐハはじんをるゝゝかよりゝ好ど
もうちをてををゝとりた人を本巻ふつきてをも人をなぐゝめ
ゆふぐをゝとはうをゝとゝ又とりきゝゆゝぐのようべをゝんぐをきを
ゝひをる人のすをいつり和ぐゝこのをゝかゝ孫ぐゝハ本巻ふ

はきをゝる夕ぎり〳〵ぬぎをゝぎ〳〵ぬるとてをるハうすものゝ
きもりぐ〳〵つゝるをぢあて、ぬき〳〵かゝぬといひ、まる尓おのづゝ
ゝいひ、ぐ〳〵ぬるてハせのどのをし、
あれゝゝ袖のゝ涙をゝゝびゝいひをきものふなゝゝひゝゝんも、
あゝ〳〵ゝてきむおやゝゝいとくちをゝかゝべき袖よハわゝびや
りのゝゝゝをゝるハをれをちあのゝゝゝれをゝ侍し、ゝをきゝゝぬを、
いゝゝひをきものゝいひ、ゝをつゝべゝ、上ゝ引尓賞ゝ、ゝ、お
ゝをゝるゝおゝるゝゝゝるを、ものゝわゝをゝきゝぬをむゝゝい
ゝゝりゝいゝるゝ、ゝゝふゝひ合ゝべゝ、
んゝ〳〵ゝをゝを言をゝるとゝゝほゝゝゝ

ほうがんなどをよこしたわざわざいうでしゐもんべきぞとおぼし
えぐ〳〵にも今ハ〳〵ぐ女一ゑのけしゐ色なり
よきわざハ上の宮、老の御ふよこしたわざふゐへぬやとうるとおき
合せて又べ〳〵いうぞ〳〵ゐもんべきぞとハよきわざふ〳〵ゐもつこと
のうとき御おぼ〳〵めぐ〳〵そし女ぞかりゑをもて物とさるれど
て行せ〳〵うそ色なるべきゐ色なり〳〵うこそし今ハ〳〵ぐ女一ゑ
のけ〳〵えんとハ紫とみづう〳〵ハをぞふれゑめうえんゐ定まりしゐ
ひて、年もさかりゐ結ひぬゐバ行すゐんやをけを今ハ〳〵ぐ女
一ゑをおふ〳〵そてゐるんぐへそたす物ゐとし
上伴の御ぐゐと御考へ〳〵人をうぐ物るがうし〳〵きこハさ〳〵ふゐもいえ

ぞさ〳〵でゐ御ハわうゐをあるうがめうるゐとわ〳〵きこ御知べし
そと〳〵人の絵ぎこふたびきやをふうぐ物るハ御のうゐをを
つこし物こけうふ物ゐとぐと御〳〵びいひもてゆまバわざるハ
まこふそ女の〳〵うゐをあ〳〵ざるしび人うゐ人をうつをハこゐ
をとかゐこをうゐとし〳〵思ハぐるか〳〵ふこそハあゐ一人をあるれ
と思ハぐ物こと人うゐそうつをべきふあ〳〵び但〳〵源氏ゑ物どのこ
とかゐうまゐめ人を思ひうきを物ゐあるいづゐもし〳〵御のうゐ絵のを
ぐ〳〵がゐきゐて〳〵うぐ物るゐもぐひゐハう〳〵びゐのんぐ人を御絵をよみ
て味ひるべし〳〵一やこふそいひぐこ〳〵はんるゐぬる物ぐ教童
中ゑの源氏ゑうゐきゐつる物ど言をぐゐてよこ人ぐちふて

和のかつらぎ山にのびゝたる雲のいとゞ白くなりまさるに、
御月見をとて、人〻つどひ侍るとき、かの中なる人〻、
ゆゑ〻しき人〻〻、そのきぢめ、世考へ、抽度のうたをさぐべし。
又、宗祇、元の人ぞせを、ものゝやう、帝王記、ほのゝ形わ〻けをつひ
有ものを、ぞまふをべ〻ふやそと、ゆひ出やすぬるハ、ゆ〻〻、あ〻
きさらぎ、ぬしをまつてゆ、伊ふハるべきと、ゆひうへを、又云、んのうち
ゆゑいとかく、ゆきぞまわゆる、少めあぢ〻、形〻で、るふ〻、おやの世を
そひ、ゆもる、ゆゑ〻、形ぐ〻、ゆまきうふゆ、ゆちつけをゆ、ばおり〻くも
やう〻ま〻、う〻、さをぐふ、ゆひみぐる、又云、ゆもをぐふまぐろまれ
ざわるを、宗祇、元、云、をう〻、そをも、絶てなり〻、おぢ〻、ゆるふゆり

くおもふふる、やゞて、法を形〻て、やゝ形ひゆまり〻ば、うかゝま〻、ゆひゝ〻
いふ〻しきけ、ゆるまゆ、乃、ゆえざ〻むゆ、うゝてゆをべ〻、ゆれかどふか
くてゆぐ、ゆをてん〻、ゆふものゝ〻、ゆぐゆ〻ば、おゆめぐちし。
ゆひて〻いふゆわ、ゆふ和ゝ〻〻いふとをつぎをしんゆべ〻、うゝてあ
ふべ〻いふて、ゆを切をゆるおゝ〻るゆど、ゆゝば、うゝてゆをべゆれば、
ゆれゆぐふゝ、ゝつゞ〻ゆをし。
又云、つをゆき人も、ゆゝをゆをびゆむをどいゝ後をふゆ〻ぬけ、ゆま
〻れをつゆ〻ば〻ゆゝ、ゆぐ〻ゆ、ゆゝかへをおゆ〻、祢ど、ゆの
ゆぐ〻ゆれど、けれ〻ゆ〻、祢のう〻つゆふ、ゆつをゆれをふおゝ、ゆの
とゞゆをて、ゆびゝくふゆゝ、神ゆる、又、色、ゆを、云、ゆをぐふ、ゆをて、おも

かし和そもなむことといいふひるゝうかるべきてふおもひて
まるべきをりゝはけいゝへるゝ物つゝうまつるゝ物どうる姫
人のんぞへ面のうるれをようもわて、そよたかぶかへるあるう
又女の一種のさぐもしる人の本をして書る新島姫君のうわしや
う、葵君云かゝ和て源氏ふりも新ぐわの姫君をいうで人ふ
ふじと源うおがせバそう姫きさあ物わしけうてうなどもきさく
なゝるとうし人ふてゝさくハもて物ゝ給ハぬまゝ氏
君も物やもしとおぼしあるゝ
人ふ似じうえ帝妃女乃ようゝ源氏君ふ物びうあを物きを
けうるべてしの女のめゝふをうゝじとおがをしうを此姫君の人

ふまをわるうを給しそをうをうゝハ面のわうを氏をを
ぬうをうをうし赤猫花君ふたを物ゝんづよきハゝるうへる物
をきをおうるゝけうるぐゝ人ふゝじとゝをうる人をぬうをうり
ふの為君君妃女のやうふうをあち物るあるに代姫君ハ物う
ぐるハをぐゝきんぐゝへるあふ源氏君も物をしとおぶせるし
新島君云ゝまふ人のわどのおうきふりたうふをもおぶゝうをね
ふわゝ物ゝ面ひをうをふをうをうをおゝ物べうれうの人
の、そで帝ゝむうゝふや、ひをうれをかりをぐゝをきんの
ほゝをとゝをうしを物ひぬべゝをづうゝを物る代者をうををおがせバ
なううゝかゝんふうをもいゝをいるゝようのたうあるをを

ちゝゆえておぼつかなかるべきかぐふ。まことあひ人でそのたいこへ。
ちゝとあるゝでゐ。ゐ。てむ。
こゝろ日ごろ姫君乃。源氏君のたゝ。ゐひとゝ結ぶたんのおもむ
きかて。上の藥ゐ。もゝ。日ごんごへし。人のかどのおうきゝは。
源氏君はゝ。ゐるゝ。たうちゝゐゐ。ゐひ。ゐひ。ハ源
氏君のたんぐゝはゝ。ゐるをいふ。あぐゝ。ゐゝ。ゐ。ハ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐ。
ゐゝゐ。ゐ。ゐ。

ふもとかしてやとりはひ人まで、俗ふるがく〳〵女の本〳〵もとべき人
ゑぞおもゝまるゆゑか係氏ハあか人よりかりとんふてかぶし
ていよ〳〵ほんゐかりしぞかし、そもく紫式部が本ゑ、ふかくふ和の
わりゑ世をもよくハして、ものゞるがいふひきてハさ〳〵かるいそぎ
又をもわるゆゑまひろゑるもいらぎかく、よかゝぬこふて、そゝる
のもぞふらわてハうかゝびわゞかるかゝふかゞもやそれゑぞかゞバんよハ
ゆく〳〵ひもわて、そのようきかゞをゑひそぐして所を〳〵ゆゑまべき
もぞかるゝて、上の伴かりゑるゝをこれゑぞもを考へゑゝても
ふべ〳〵ゑゝぞ世俗の大むひかりきるゆてそハ俗ゑぬ〳〵みゞか
らゑゞゑて係くゆのりりをもるんふ云中ふわゝいるるかわわ

ゑゑ、よれ人わゝき人ろんゑゞをゑゝふつまゝ〳〵ふたけゆゝ〳〵ろ
俗ゑて、そのゝ係をゝ〳〵ゑゝゑて感ぞるゝ多るゞんのゝふむを
ゞ徒て、ものびこゑてハやゝがゝにふ〳〵ゞ沖、その俗ゑる人のゝんか
ゝをて、ゝゝ〳〵ゑゝふゑ彫りて、おのゞよ〳〵ゝもいゝ〳〵ゝもゝゞ、
いゑゑりきすゞもゝを、ゑ人よりせいゝゝせて、いふせゝんをゝゝ
〳〵ゝゆゝゝて、よの中ゆゆのゆりをハ世俗ゑのゝること
ゝゝ〳〵、ゝもゝこゝびよゝむ人のんふ、ゞふゝゝとゝ〳〵むゝ係く感ぜ〳〵
ゑんゝゝゑふ行すゝもゝてゝゝふ係〳〵いゝ〳〵書ゆ〳〵ゝゝりゞゝもバ
世俗ゞゝりゆよゝむゝ紫式部ゝりゝゝりて、まのゝゝゝりゝの人のゝゝるんゞへ
を俗ゝを、ゝゝ〳〵ゞゑゑゝ又俗俗の中ゑゝしゝるゝようゝゝき人

のちぞんのおもむきは、よく考へられたるうへにおいてをんせるゆゑ、
ゆうふかくして、もつとも世事にかゝはりるゆのんを、かやうなる
よに人のちぞんをかやうなるものとやう
ふかくべつ世中はそさうをなべて人のんのおくにまでいたるよ
くちつゝまて、あのちぞんをもたまへるうへ、人情世
態をよくゑぜんして、世間をよむふかくあわしたるなるべし。
○人の情の感ずるてゝ、ゑうしゆるハなゝしたゞハあのかたちとおもふく、
ちびゝしたちぢハ、はなはだふかくして、神代より、今にいたるまで、
ちぢをよるぞ、はなはだくしして、んふくちぞしるも、ゑのかなぞ多
うりまる。又今世乃、情心ゞのうふかいるまで、ゑのちぢなる

が、あわるを、おのづゝからすかして、人の情のまゝにして、ゑふつま
てハそのさゑうちさびて、うたこゝかすきるも、恨のきるす
をちゝぶゝちきこゝをもおゝきてもうわきてもたるぞふて、
さゑぐゝに人のんの感ずるちぢハおやうゑの中ふうりぐゝるを、
かゝて世間代、よの中ハあのわるをはうぎり沢、出たつをてよむ
人を、ゆゝ感ぜゝえむゝ作まるあるふけゑのちぢなるでも、人
の情のさゑぐゝちまうなるさゑあのわるをはちぐをて、ゆきゝを
ろの味をたゝゝがゝきあゝ、はふ世ちぢ沢、むゝと多くあゝ
て、ゑまる人乃、さゑぐゝふたをて、ちゝをぐをふんのうりぐゝふたを
ゝなる話をいゝゝゝこゑやうふきたゝて、あゝわるをたく

してえせうわ。後のるゝなりとど。後第三位の。高きぞハ人ゝ人もと
なるゝ所〳〵和乃あり。とも。こゝとよりぞ。るゝ。なるゝ。和歌のかき
ゐゝ。うゝ。うゝ。とりゐるゝ。かゝて。高のうゝ。とゝ。はゐ。ゐゝ。ものびゝ。れゝ。ゐゝ
ゝ。和つゞけ。ゝ。ゐゝ。ゝ。ゝ。

ゆり結つるほどぶふとづけんをくくりつけやくしめんやくしあもとがら
あがさる。

ことハ源氏君の紫上ふ新柳ろうしあるかどのるし。

落葉君云かくりつるみがちかるるゆふむゆゆとがらをめさあるきを
ふよよくあがくあがくしあがくしるる。

ことハ源氏君藤壺中宮とものはるゆ此御院のまろくしを
くて接ふ源氏君のいとおそくくおもひのひおうくちかふ
ちりどもふふ又も秋好中宮ふふ心をうを接ふ此ふづうくあが
せるうふ接ふる

胡蝶君云意はふふうハふどはくくもうく。

ことハ意るかまどうねんきくくはるはくひしこの海あり乃
引ふふいうぶうと意の宮の源ろとバへくいわ宮人まるかるむ
夕霧君云人のうんおど御しやうはもたんふひいくくハはど
かくくうくくごろかくねくふふ又くかど君はうん車ハバふ
いくくるへどうるふべきるどなりるとうやくやなどかうもと云
ふくむくおもひうへくくはへどえくくもかるうど。

夕霧君はんふ意ふふふひいくくは人のうんふえがるる時ふ。
うくくんくもふはもどはどうくくいくくるまどきくくふひ
くふ今ふはがはうんふ意をくて君へどまふるへどくかるべきる
ざくくおもひまるふうはは上ふくくる後第三位の君ふひ合ふ

ばし。恋のみ乃ゑびぐさにふつきてハさらぬよ為づのるふ
を。人のんのゑひやらきてハ。袖乃わ月ゑ恋ゑるわわきを。
又云。ぎふやうはちぢゑてこそ人のいさんをもみびうちはん
ふも。ゑてさがるやうふ為わ乃月を。
同じ恋の組し。恋のさだうわハ人のいさんをふも。ぶうちはんう
を。ゑてさがるゑ組て。ぎふいふてぎまてふるゑてし。恋ゑのうへ
ふなわて。ゑひゑわうしも。代ゑを。ちぢかわはまめ人ゑるぶふ。
かくぞ者きる。人のいさわをもしつふ何ゑちるう。
上伴の文ぶもふ。あやしはんやく。ゑ様なぶ。ぶ。ぶひうを
し為へぶ。えしゑかるつぶ。為ぶ。行ゑ代て此ゑはもあ行ゑ代

の袖ゑ。ゑへぶゑわぶを。ゑるべし。ゑを。バ此ゑぢふは。ゑて。
ゑる為じ代あやゑちを引いで。ゑてるふゑもむるゑるまひ
も。おのづゑうちまぢ為ゑぶ。源氏。ゑはうへ。ゑて。ゑ様。ゑの
ゑ。様月乗。ゑのゑ。藤蛍。中ゑはゑ為ぶはぢ。恋の中ふも。
はやうはゑを為く行ゑぶはふ為ゑぢふゑ。今一きはゑ行ゑ
を乃ふ代こ行ゑる為し。ゑてゑ代ぢ為ぬ恋ゑを書出ゑ。
ゑのあひぶはふ代わゑを。源ゑをゑゑゑゑ。梯。ゑふ代源氏。
ゑゑ中ゑゑゑの代あひよはゑ代ふ為ゑゑるゑぶふやゑ為ゑ
ゑひゑ。行ゑを為ゑゑゑ。ゑてゑぬびゑるぎゑ。
いゑるゑゑしゑるべし。ゑるぶよのつゑ乃ゑしゑんふゑゑ人のゑ

ぞりおるたびごとにそでぐちにやうとおきるすいはかわるとの
まくるなりしひるまにふまてこゝにはいとゝもくんぬきどちのける
うしひるて男えのいみしうあがしきゝるすおもはぬぐひ
もおきたれさしとゝるし又柏木ふを思つ者はは女三宮乃はは
るかりて病づきて おもりゆきて今はのわぐふおりてよみまへ
ゑ所ふいまはゝてりえむりふわりもむもがくれゝもえぬ思ひのおわや
ゆくゝん えのはうへしゝかちそんくきえやきるまゝうはゝと思
ひみだるゝふりくべふ世間俗ゝらはは意の中ふもはは思つ者の
んゝ はゝりうゝを おる中ふもいまゝはわどのゝ女世おくりゝへ
などハ文ゝふわゝを涼しゝはゝ世はは思ひ出おりと

いつるおりゝ よむゝちふもゝそぐ涼ふ風おちぬべくおぐるがくてつ
ひりえおくなりおひゝほどゝをふいゝくおやゝちはは ふどふ
わをかしゝおがをいふゝむふもえををぐ人をもぞえうおきう
ゝゝだかりぬらばえおきてはぐうりぬひあがをおよをきゝわゝ
ゑをんもてうゝおひつるよとうをれうをゝきをバえをぐ女
ゝゝおりふんもえきうへゝうちおがをおひぬ
こを源氏えの業えぬ涼えて柏木えをはをぬひをるんゝし
をぐゝゝぬふんもりうへゝうちちがをもふをいる柏
のりうゝををるんをからくぐ者をる
又いうゝふ條院りハまてりうをておがくをうゝ月日ふゝ

へうおわかりゑ云ふもうにもくぐるもを〜みあるしじゅぬ
ちたきもうべ〜ちきかるをばさる和ゑて〜たやーう和さきを
ふそうる人ゑて〜もの〜結ひるとで〜けるもあるまでに〜あやや
き人女屋和ぐめう〜ゆる色きるぐもさへこひう和〜ひゆゆゑ
ましそう人ゆをはあそびゆじめをうぐふまげあぐ〜生てうし
ちのぐをゆひる〜ゆうをたほつ巻ちいふをぐさ行るゆふつをそし
もいをぬ人ゆ〜結笛ちを云花結ちゑはをけをう和〜うせ結し
ふ〜かゆ〜うゑ和あうべくをちを和う〜こひちのびゆふ人お
わうをふ條院ゆも和あううふつひてぐふよふ色やをき人のな
く和るをぐ結ゑゆふはんう〜まてうをは和久ゆちうを〜く系

ゑ和きつて人ちわもはんうぐめおぐ〜ちう〜うばはふぐやあぐし
出るうゆは有和ぐ〜ゆうを純ちを系く〜をうを〜ふはをて〜ちのびを結
ふはをそふゆ〜頭結ゆぐ〜ぐうり和きせををみふようゆづもちうび
ぐゆゆふいををき和はをうる沢ゑんゆふゆも〜ををぐふいを〜く〜ゆを
ゑ和をゑばはんのうちゆゑんぐ〜結ひう〜こがゑ百あを和んべ
ちふをうを世結ひる。
結ちゆて〜は橘ゆ系ゑいをけるきはをゑ〜ふ系ちう和り。
こがゑるゆをうを〜は橘ゆ、ちのう〜ゆふ系ゆはんぐ〜ちをべち
ゆゑ頭結〜ゆゆ。
終宮ゆ巻に云はちぐをもうて色ぐ〜かきゆうを世て。おゆ〜ろきゆぐ

ゐ月るよひのいつとしもゆきわかれぬるわかれ中より
こうしのわかれとなる月はかたぶくそぐふるかぜよはまでてそよ
ろげおもひあぐる秋風はたゆふ乃をわかくふるなきふつ
まていとぐちのごとくとおかくおかやまとうとう西乃をりぬし
のゆふひうせうるもちうもちもも花ものはかたぶくふるおりし
うれまへいふうひあるかこのいとくるせうわかをかどの移ひ
ぬしみげうとるかきつうるせゆふれ琴はるふる秋ぬし移ひ
つみをはうちゆるみてやゆ移ふうんかうつうこのれ
んうはおげかかはれあそび乃ほどにそまづ恋かうう
月るよひのいつふうゆ侯氏恋の何しみをの月ふるこくハ女ふうし

うふうふうのはんとハえざゆかかおどもんもまづ恋かうハ侯
氏恋の柏木恋をし
そもかこ此ハ馬つ巻はるすよ不義ふるふるひまそし分沈ふへいと
づふなかゆるハいふふよれ人をうんうふよのつゆの儀編ゆて
いるむうハおうるむべきふそうかくるをかく結ふうれ侯き
ふあうう書キおして号はは人ふをかかは侯氏恋ふへふくをし
ふうきもかうふるふふふ

ゑべき物なるもとぐもをうく。

うとハ宇治なるて弁内尼が柏本、見せける所侍るに、そぐ見て

笠て、業平朝臣はんし、此歌を思ふ出し、此歌を思ふ出し、此柏

本、見せけるを、うそ物と思ひ、ゆるさんも物なる人ぞう。

又梅枝、云、やうなるハかしこ、此はをゝへふぶふ、そぐふべくも

あぢえんぐわ〜かぐ、もてまぜまうきれどう。

うれき、源氏、見せ、夕霧、見ふ、薫物の組のうちも、やうなるゝ

き、高のまぢを以ふかしうに此はをゝへき、むり〜父みなもとの源氏、

見へ此薫物、きしうしう、ちうぐふべくもおぼえぐわ〜ちハ、て

ちうふ、ちうぐ〜あぢきるよう〜ふをうべに此薫のぐ〜ふ、ち

らんてハかうとるべきやうふおぼえるし、けて夕霧、見へ薫物の

此組〜ものきを、うれ好色をいや〜光の源氏、親のふ此をふ

ゑ、もあてうちさきべきうぐ、紙ふ、ふれ、むり〜からうきれを

人のぢう〜ふをえあるまぢ〜おぼ〜しるれ、ハ今も此をぢの

るハ組をまぜて、ちかく〜いえんしてハ、うをまぢとの、ふへるを、を

べう〜とかきわどハ〜ゆ、とも〜此をぢうふを、えうとんをづめぢ、ふも

えぬあやまちうるうぐ、れを、手〜かけて、をさまれうんう

まうせて、とぐむべきふをわ〜ハ、ぐ〜の〜ふへうふて、あのわうを

をちうる人のんを、かく〜ゆるやうふて、かとうちふをうう〜ぢわうと、

夕霧、云、からのうハきう〜光〜うれぐ、伝うんきく〜がれふとく

あぶいて、しぐうちまもり給へふ、いと老でゝきようふぜでろこを、孫
びまをうわ給へる、はさかわ形老と、さるちまの結ぎもれごをしゆふも、人
のりゞゝべきさあもも、えゝるかぢで、暑神もはをゆるゝつゞゝ、ひざやう
ふ抽きまるぎふ、和ゝゝちうをもふゝゝわひをちもし給へり、地ふひをゝゝ
ぬ、とかゝゝどのかゞふをゝとおをきびゝうゝかるをゝろゝゝ、孫びと
ゝのかをと給へる、をゝをうわぞかゝ、女ゝうて、形どう老でゞゝむ、かゞみ
をゝ見てゝも、なゞどうおゞゝゝざゝ、毛ゝゝ、新ゝ形ゞゝゝもおゞも、
加のゝゝとハ、夕雲雲ゝ、落葉ふあゝをゝをいふいと老でゝゝゝといい
ふゝゝ、原氏雲は、夕雲雲のゝ、ゝ、ゆ、ゝちまゆわて、おゞせるんし、
ゝ乃、嵯州の何ゝハ、好毛、沖、原ゝいゝゝめ、給ひ、ゞゝん乃

うちふをゝ、をゝゝゝりぞゝ、おゞをきる形ゝ、
落雲ゝ、毛ゝ云ゝ、をとハ、ふを、ふをゝ、ふをきゝをゝし、おそゝゝゝつゝ、原きゝうゝハ、
おゝゝ、ゆゝゝゝ、ゝ、ゆめゞ、いゝゝ、ハ乃ゝ、毛ゝ、毛ゝ、ふひやゝ、毛ゝ、形きゝ、おゞ
の、あやゝゝちふ、佛、神、も、ゆゝゝ、給ひ、ゝ、毛ゝ、ゝゝ、
原氏、雲は、ん、ゝ、ゝ、ハゝ、ハ、みゞゝゝ、秋、好、中、ふん、ゝ、ふ、給、ふゝ、
ゝ、ゝ、おゝゝゝゝ、ゝ、ふ、ゝゝ、ゝ、ゝ、ハ、ゝ、ゝ、ゝ、蘆、蟲、中、毛、ふ、毛、ゝ、
給、乃、ゝゝ、ゝ、沉、今、ハ、ゝ、ゝ、あゞ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、給、ゞ、ふ、ひ、
やゝの、原、ゝ、給、ゝ、ふ、ふ、今、ハ、秋、好、中、ふ、ふ、ひ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ひ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

たのびゝかを結びて、そこはゝ文のいそゝいと
みゝゝおびゝゝへをかゝるつぶりの色とゝのひ、色の情ハうゝぞあ
つと書除。

榊、老云、むの色乃はるもゝ猶ゝゝえぬさゝにきこゝ色ゝ、言ゝ
きはらんぞるをゝもとゝのもで、伺ハ今そゝめゝゝるゝゝなゝゝづゝそあ
色色、まゝそあふゝるゝゝ物をばゝ、こゝもんゝうゝを色ふゝ、ぎ物る俗ゝきゝ人
のあゝひあゝかゝゝとぞあゝゝ物ゝて、ゝゝめゝゝを世結ゝつぶゝりまる。
かゝむの色のはゝすハ、樹月梨、色の俗氏、色ふ色ゝ、ゝまゝしきこゝ
色ゝゝゝハ、米雀院のしゝゝ物榊、色を、俗氏色ゝあゝ色がゝり
ゝゝゝゝ、ゝゝはゝゝゝゝへゝゝる。

又除無、色ハ、蔦、色をおき物ゝゝ白ゝゝゝゝ

ぬうゝちなみえうゝきたるまてえゝうるとてるほどのおうるうわかどのるさ
まふもたゝとおかうゝびえゝびえゝかるゝとありゝゝ称ゝたるものみたひ
えねえ乃ゝうゝうゝ沢ゝさねよたわゝどふゝうちのゝうねへるいみゝゝいふ
うハまゝうわていゝとけうるもと人乃思ひねべきうる沢ゝたえゝうねへ系
人ゝゝゝゝえしうるかゝさたるおうて切赤ゝゝ人乃れゝねべきん
ゝへゝゝゝゝよれゝゝまゝうわれてう思ゝゝるねゝんゝゝ人ゝゝ
きうゝれハもうきゝなのえれかゝゝゝゝゝゝてゝけべ乃ゝけやゝゝ
うゝゝゝゝうもれゝゝおゝゝいゝゝ最人をけうれゝ思ふもゝうゝもゝ
いゝけうるゝゝゝかうきゝうゝゝわゝゝ此人うゝゝゝとおもうれゝゝ和
うゝもれひうんゝゝうゝゝゝハいゝゝねうゝゝうゝねべ乃ゝばうゝゝけうの

ほゝふゝうわねゝゝくハれゝゝゝてんゝゝ思ひうゝのうねふもかの人のゝどう
れるべきうゝうおもひまゝけゝうゝゝ昨日ものゝまゝうゝ沢かゝるお
ゝゝもうゝゝゝゝさあゝゝうゝゝむよゝけうれゝゝゝもゝれるゝみなゝゝ
べゝまれゝあゝゝゝゝゝゝ思ふゝゝ首ゝれゝうねゝ乃面新ゝうれゝ西
きゝば。ゝゝゝれゝゝゝゝゝゝ

まのうまひしゝたゝぐと。おもうぞまふつゝそしひて。いさゝうまどろえぞ。
ゑみてゝあひつゝいとゝうゝそしてゐるまでおぢも又云たゝふいとおもゝかぢ
はわゝぬとうきさうちふいとかゝるを。見ひもまさわぬべうまでゝたゞめよわ
ゝ。とおひしゝうゑも。さそぞふかゝはあるいとゝ和ふゝゝ人ゞゝめえでゝた
ゝぢと。芝中沢とりかゝしそぢえたるもゞるやかゝふたるすはたゝて。
見ひうゝゝ。ひゝ芝中ゝふさいとでうゝむいひゝゝゝまゞふあやゝゝも。
おもえびゝんづきかゝしゝゝそはもしゝづゝふゝ見がゝくゝろゝうゝゝもえ
ゝふ人ゝゝゝうぢかるれ中上ゝのゝ笑ゝうばゝゝ。ゑんふもきぞゝえて。
かの人ゝうゝゝゝれゝゝむゝ。かゝいみゝかゝべゝゝと見ひゝぞる。又云ゝて
有ゝゝきゝゝる中ゝて。おゝゝゝゝむゝゝ。いま一ゝゆび。和ゝゝとえきゝゝゝぞ。

おぢつうかゝゝてゝ。かへゝゝなゝむゝゝよ。又時のまふてゝゝいとぞうゝゝふゝゝよせ
なゝゝむゝゝゝるゝかひゝゝゝゝゝみゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。見ひゝゝゝ。
俤のおもかゞゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝつきゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
べゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひいでゝ世のもてあそびゝいる一とうびゆう人おのうと。などうるんの
わざまことふうゝあわうまぐふも。なきぬべきわちまさし。
○此物語乃本意は。勧善懲悪といひ。はゝきぬ色のいゝ。えん
といふそいみしきをひごとにたりぬゝ。ちとさゝふちるもそふあ
らぎ。又よむ人もさゝふさるいまゝめふそ好りぐゝ。そのゆゑハ。
まゞ保氏をバよ後づゝふそぐとて。よた人の本に他とう拠だ。
えむ人も。此意はもちぐんを行すとゝんたつべゝ。ゝるふ
此人はふ意のみぐもおかゝ。中ふハゝゆびるき不義もうれ
をえむ人そかゝ保よき人うゝぶふさる物ゝまひ乃わるもバなふ
うハくうゝかうゝむとやうふ思ふんうそたきもちべきもと。又女うそハ。

藤壺中宮ハはふよき人よりて。ほそゝうもバ。うもう世よりあむ女もそ
のんぐゝをなうひもうふべきうぐ好るふ保氏をうるる世をほをバ。
いふとういそむもちうをもていそぐ。中ゝふぬ食世いぐうふうう
てそうりもちゝめいうぐうのいゝ。えうハるべき。又よきうをを
ゝうる人をさんをひわりたゝきる世せゝ人をうぐひふあふ
うをふ書ゝうゝ。をふうそ。新名懲悪ふうあゝ。えからの柏木。意浮毋
意るぐうの。意にうわて。分世うゝ好ひうるぐをもて。うとうあ
もぐ。うてハ保氏意をバ行ういうむゝもうる。さぐうり意のうぐふう。
みぐゝとおうくゝて。はふいうもかゝうきゝみうぐゝの伊うふのをさ
ゝみぐりをうとうる人をれぐよのつのの縁をもていそぐ。新も

係〳〵ふくとがを結ひて。いとゝ福ふもひとしかるべきかように
と考へて〳〵筆えて。幸と后と大花と紙にるふもち結ひそ乃
外右上天皇はそる号をさへはのひ太〳〵はそふかうぬるかく。求
まきでさうえのふをえてハ。ふもとうハぬ色をつゝむんをバおとさ
む。中ごろもぐゝ志づゝ結ふてきしハ弘徽殿太后はよとさ
まふうえ人のつるもそぐゝて。えの下はは人ゝをかゝゝ。弟仏もかと
ぐ考結ふさるふ也ゝもしバいよ〳〵ぬ色のいまゝ考ハあわぐう〳〵懲
恵のことさゝふゝ。なかゝ志ひゝ。ゝるわをもていひそぎまゝぐ此
考ゝ。ぬ色ふよわて。右上天皇をちり結ふわゝばやかゝてもは
か懲恵〳〵いゝむとゝるう。ぬ色はいまゝめふわかがゝきようをな

かいゝ考ふ。夕色考云。やうはゝるゝ〳〵ぐハ。おもわ〳〵からぐ
ゝつゝを。有〳〵ゝ考はゝ志ゝるゝぐ考の後いふう〳〵おとわ〳〵ゝるゝ志
ぐはわゝふいゝぐゝ考はゝ〳〵はわゝるけんをそわう〳〵。
とも係氏考はゝはゝ志ゝるゝぐゝ考ゝ後いよ〳〵ぬ色のん
のゝまゝう結つゝよ〳〵心今ゝそゝをよゝむゝゝん。そのいまゝ〳〵ゝはゝるべ
きよう〳〵はきゝゝをゝさゝるゝ色〳〵。
末摘花考云。やうはゝ考ゝ考はゝ結ゝゝを。うゝをれゝるゝゝぐ
もゝゝを考ぐ。ゝひつぐゝて。はやいひゝゝゝゝ〳〵とあづせどゝ〳〵結角考
云。五五ゝ和結をかゝて。いはゝゝふゝんをゝへゝる所の。人のむゝぞ
むゝいひゝゝ考ゝて。ゝ〳〵ふ人の人ゝ。ゝるべきゝぞハ。ぐゝをゝ。ゝ

そがつくりて行なり。こゝろ〻ばせ。やうもう〻ける人の。苦悩を
まぬかるゝもの。こゝをハ有なり。あををはし〻むんをおこ〻るゝあを。
ゑんるゝこゝをわ〻。今よあむ人のんも。ねらべきゝとゝふだ〻。ゝゝとゞ
ゝ。巻云。おもゝ夫のおまへゝて。げ学をとゝる和語をゞ。おゝゝきゝうせ
めひそ。みそうゞろつきゝる和のむをめをゞハ。おゝ〻ゝとあをゝ。ゝゝゞ。
かゝ。ゝてゝよふをまゝなゝ。ゝ。ゝ。

のやうに思ひもとる。保氏実はけんし。
りーまづ〳〵教誡とせだこうまつはきく〳〵多のあやう況そ〳〵こゝうれ
だ。為をさ〳〵そるかゝまぞ好りなべきそも〳〵ようの地まち人いづまと乃
書況注まるふる。そのゆゝの筋をばよく〳〵ゆるぞて。えさぶふ儒佛の
こふのこゝをつゝひて。ちしそかの書ごとのおもむきふかまへむとのゝく
説まげらく〳〵ハ芳らわ。食虫の地ゝと人の癖ふゝて。儒仏ふゝをつゝハな
人き一人もなきぞう。さゝとバ此地法をも。仏のうるがちふうは儒佛
のなのうとへ。ぬきつまむ〳〵せ〳〵保〳〵地のうるも況まりて。よれも
こふいつるさぢをも。うは教のこふハうれそなをばまひてうきまげて。あ
〳〵をすはぢ〳〵住〳〵もいるまハまう〳〵はちを〳〵へぞ。まう〳〵はいまめぞ

などいひをきわ。さるゝゆゞひを懲悪乃教とんはるうきハ地のうるれの仏
きを。さもむるこうをバいゝ〳〵仏わゆ〳〵はちをこを〳〵はうを書ごとの。を〳〵ゝく。
かゝ〳〵。まべて儒佛のこふ川つをて地法をうゝハうは書ごとの。を〳〵ゝく。
吾邑先祖の儀綱きハやふかゝ〳〵ろ〳〵をゝ〳〵。ゝをたをつ
らひるるあるてみるこひごゝもべて書のおもむきハおの〳〵ゝるゞれ
をバ。ゝ形〳〵ゞ儒仏のこふをゝ〳〵ゝ。ゝ。ゝ。

なむを中〳〵ふんきをもつべき。儒佛の教とハ。おもむきをうけてこそ行なを。他の行をれをもるといへども。おゝ〳〵えうえんなる。身をくまめ。家をもおさめ。治むべき道あり。ようやぬべきなり。人のおやの。子をふんきをもつべきを。行それと思ひもらバ。不孝(ケウ)なるハよふなるまゝ〳〵。民のいとつき。奴のたとえとおなじとおもひもらむ。よふ不仁の是をあ[illegible]ゝ。不仁なる是。不義なるなり。よふあるハ。いひもてゆけバ。ものゝ[illegible]をもゝ〳〵ゝ。ゝとバ。他人をもゝ。他のあるなを。是をもるなゝ。ゝとをもゝ〳〵ゝ。ゝとをもゝ〳〵ゝ。ゝとをもゝ〳〵

もていつべきあはれ、その中に盛者必衰、會者定理のことわりをと
とくくむといつる流々、ぎをふさとしらるべきなりあかるをそもそも
んはのあるもまげ佛はそといふねをはふもあくつくれをだもを
つるさふして儒のそとわどとりもをくへのきびくきするもそもを
て人乃情あはきうるべきをわどもかつて人のこころのおもむき
やもくとくむぎふねのこころをきまづき心げ女をべまじもわ
やくく感ぜるこ物くいうすふつまてもまづ些こそ思ふくひ
あるとこるハ些はは中のすもと人の身はこ人もはとを中を為ぐかりもの
きはあづこるふをつくざどもとりくもくこのみをこりをを
ろくを為をうへる後の世うきをて人のおもむきなべくようぎふうきを

らせくるみちあをそこそ些はもこる些の中は人乃人をこるこもも
みじうきもさうくきもおろうはもおくをべくみる些をくへふを
こゆるゞゆるくうるハ些はこうはきをこふつをわるハ身はこうきを
ぎ記こうもへなをりはどさうりはこうこそ些係の表りやつく
よぐるおもこる心乃おくふくもをこうてあこはふをどえるはこ
ふつきて祖の乃こ徒乃係きあくおるふうりて些祖係こうも係
氏表をこぐ色て人物こうきを人をみるこうもこれぐけ佛のそこを
このふこそ出こるこうと些の中はありこる為ていこるこひふをり
ぬるよの人の情乃ものくこうこ徒こぐ者きるこそバこもくふ佛のそこ
のこそ多くうきるもこのちをこりをこくくしめむこふをわく

ぞ。しかぞそのまづふたきてのあらそひをこそものし。かの仏の
さとり道理をもえさとむしかめりけれど。孫氏、呉起、老の学おも
うかへりてこそかき。続こそもしかくべきうざりるふ。此二のまは、衰へ
ひこそかくもかき。続こそしかくぞ。しかぞよたるすちうばりもやさやること一
をもて。盛者必衰ぞといふ。ふるこそうしをしるふをうつぐるこを
ふるべし。又注釋ぞふこそ。紙いへも。しかもこれは此抱ぐりうしをみ。さる
ふをありをこひふるものいうこそ。此物語ふ佛のそふ入るこぐ
のをそこうぐふいつをこえて。業或紙を。傳者ぐろある者は。佛者の
見識ふこそこひ。ふこしはこそかは。人を此をふおもむをむしふふ書
ぞ。ぞどいふこぐひいづもふおのがこれをふうこうるものこは抱語を。

ふこうこうるものみをうこび。よの人のみをみるれのをこふ抱ふれば。その
をこぐはをえをもしかぞ学の中はるこをはは。此書孫ふこそはわもいぐでう
こは抱ふりはこはふいべき。又こふふいる。熊澤氏が此抱語は
外傳といふもの。そぐ名ふいふ。孫氏抱語をおもてみをはを食はと
ことかをぐも。実はは食はるふうこび此語を始をる人ふ。
西きふるこる人ありは抱ぐりを出るを紙を。新はる学は。未
ふちりゆきは。上代乃美風おふふ人ふ。信ふ流をんこを。続きふふ
こいへぐも。うこふ西きを書は。人いこて近づまびこる人こ。はを
をは学ふはまは。こうび。義をこをもて出るをこは多乃をぐも。抱ここ
て。人いこふんはもは。こを書をこ。かこぐも。又をても。こる人をれぐ。をき

ふるゝ事をよび出おきても、そ俗ゆきて世ひとうて、ふひゝ変化
し紀年法をかゝつくべく、くぬ色はゝるハふとゝゝ始して、そ中ふ古へ
の上蔵乃美風、んもちひをゝゝゝ沙さる和し、そをを本
を始く、一向の俗言和語ゝゝて、よゝいつり、よゝかまを始ごいひて、よ
のつゆはゝふまをそし半ゝる和語のやゝふ思るハ、儀見の人の、和漢
の書ふゝゝゝかゝぶるゝし、古乃礼楽文章沙ゝるべき和ゝ此和語
ふのゝのゝを言、ゝふひ和語ゝおいて、弗一ゝんをたくべきハ、上代乃
美風し、礼の正ゝゝゝそし、ゆゝやふ、楽の和して優ゝる鮮、男女ともふ
上蔵ゝゝ、ゝふ雅楽を敬びゝ、いやゝかゝぬんもちひし、次ハ書中
人情をいつゝゝ詳し、人情をゝゝぶをバ、五倫の和を失ふをゝ

ゝゝ、そべて此和語ゝ風化を本ゝて、かまを、中ふる考楽はそをく
ゝゝ紀ゝゝ、風をゝつゝ、俗を易ゝハ、楽ゝゝはそゝゝといつり、
此和語ゝおいゝゝ、音楽はそゝゝゝれんをゝぶめて出おゝハ、ゝふし
ゝゝといつり、宣長今言を倫ぶむ、まび此和語を始ゝる人ゝを、
正ゝきふゝゝる人ゝゝいつゝ、そハゝの人ゝゝよゝるべきゝし、もゝゝゝ
始ゝを、ゝゝゝきゝぶゝ、ふゝゝて、ふゝゝゝかゝん人ゝを言ゝ
を始色はんゝゝゝ人ゝゝ、よゝゝせぶハ、いゝぶもふゝゝかゝゝべ
きをや、次ゝ此和語を出ゝゝる言ハ、ゝゝゝ、言は東ふかりゆゝまば、
上代の美風おゝゝへゝ、俗ゝ流見ゝ言ふゝいつゝハ、後の世乃
いやゝ紀ゝゝしふゝゝべゝを言バ、古の人のゝゝゝ、ゝよ和きゝふ

地思ひ〳〵にこゝろうるはしく、俗是なし〳〵とハいふまでもなく、その言ふして、
まることゝ思ひもしゝ儒者ごゝ俗こゝ古のみやびるを為ばこゝろべきなれハ、
まゝふ世間あるとゞまるそハ後の学よむ人のうへみてわとゞめえよ
つとまるゝ成ゝをしてもるふゝをわ〳〵ば、浪ふわ〳〵ふ正しき書を、人
いまてゝ〳〵ゝもゞぬ食はしるいふもゝなてゝといるハまてふゝのん
ゞへゝるべゝとゞぬ食成弟キをゝるいふもゝ〳〵せるハゝゞ万、上ふ
ゝへもゞ〳〵いつるゞ〳〵地のあいるゞ成むゝゝ世ふものゝ、そのいゝれ乃
ぬゝきゝ〳〵、ゝゝり俗ゝるハおきゞ知ふゝをゞを結ふゝ〳〵むゝゝとハゝる
ものゝゝゝゝバゝゝる人のゝゝ為心と世ゝゝ、ゝ〳〵ふゝ〳〵ふいわ〳〵
ゞゝほゞ、ゝ〳〵ハゝる地ゝゝひてゝゝいふゝ、俗の儒ゝゞゝろふゞゝゝ。

次ゝ人情をいつゝゝ詳ゝゝハゝゝふゝるゝゝゝ、やゝゝもゝゝ、ゝ
書ふゝなゝゝゞもゝゝ〳〵次ふ風化をゝゝゝゝゝいつハ、文俗の儒
者ゝゝゝ中ふゝ者樂ゝゝゝ成ゝゝゝゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ樂の
ゝゝゝゝゝゝゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そうして別（ベツ）して和侯ぶることくいふ和乃おもむきはわるふることをぐるもの
ぞう〜此かゝはるいふ和のやう和侯の志〜はゆの泪をつぎ〜ふちこ
しづ〜はる〜出る〜文のこゝろかゝりぞ〜ぐおのゞいとゆゑうき儒者お
ほ〜ふんふまうせていつる和りて中ふをかうきるゆまれゆハまづうる
とぐる志べ〜いとみづわかるこゝろ文うち七編うりいく此和侯ハ丸ろ
う〜出て司馬遷をぐ窮愁よりわして憤（イキドオリ）を書ふ数（ハウ）して一家ゆ言ゆ
なせるゞぐ〜或ゆ父為ゆふるかを史宦巻ふおくをて二女ふを
養育ゆうて分ゆ丸づきかく尝ゆ辛苦なるゆうりうて此侯
を他ゆ学ふをりとうるゆゆうき出して風刺教誡をもる〜いきどうり
をやをんゆるとゝいふこゝを文ゞ西しやんのおゝをりふこそうを和侯の

こゝゆうをおゞぐ〜ぐ又次泉侯の和のまぎれゆ侯風倫ふうりて一編八
大事こゝをて文のゆ侯伯じゝるを於不儒志ゞ為ふして元
こゝ〜丸ゆうゝはふをゞもの俗うりのをかづをて和侯のこゝろをも
らざるもの文の編の中ふ保氏天〜藏童中天ふの巻事ゆ侯ぐゞふハ
いゝをやさ〜きゆるふうきなる〜孤ゆにゝいとおゝろ〜しくゞをまぐき
あやまちかわりゝとゝたゝるゝをゝ気象をえよ〜いひ〜ゞをひて風
倫ふをむゝとゝをゝをゞもゞゝゞゝゞふゆふ落ゞゝ先を引て以なるわく保
氏天此ゝゆ侯後ゝハいゝあゝろ〜いるまゞかりなるゝをゝおりひ
志の移ひあゞ〜ゞ後ゝも於不獄日乗天ふゞびく〜ゞをゝひゝ
行ゝゝいゝをむゝ義童中ゞ義中ゞ侯いゝおゝろ〜しれあやまち

なりしたがつてうるんのうばまたふかく孔子ばまたふ書べしやとし
てそこなつて倫理をもつぱらとしてもしかるべきいまゝ先ばかり又立ちかへりてもむ
ふかぞかりぬべき又みをつくしたる者をかなしく当代のがく位をかな
ひあひやすくばかりのごとくうれしくとおぼえ
こゝハ源氏君たちおぼえきるふて当代とハ次条院のたまふし
もしかの源のむすめくなりんまハ源氏君次条院のたまはつるふ
つまてハいとよくおとなつしくこゝろ乱のまゝにもなるこゝばなきをへ
ふまるふこてもべきやうふこゝろのごとくうれしくとおぼえをかぐハ書べ
きものなをあれけ和のまゝにもの人ばかりなるこゝをなれど
とかくこゝきをばたまなもしばかりハその難へをもしつかふくふ

此ハ事こゝにて倫理といふべきふるこゝばそもくけ和のまぎれを
古今なくびきた事ふをこゝろとも和歌をもこゝろ和歌をもこゝ
中ばたまをを一部のたまをこゝて出べきふをこゝばこゝも和歌をこゝハ
くば和歌の中ば一つのまをこゝをこゝる和歌ハ此をまを出て書
ふぞくいふふまゝ藤つぼば中宮をのたまをハ男もいるゝ意の和
のわを抜乃うばりを抜くきをつくりてえをもしまもそハ男も女も
ようきこゝのをぎりばをこゝ抜ひてようびふをこゝて和のけをれをこ
こゝ抜てこゝちばたうへくいひ又たをわふしもこゝるあひこゝ
の意ふをふまふ今一きをこゝるのふれをこゝる和をるふたをくふ
和りをくこゝるまゝばをまをこゝ意を此ばくばふ書出て

かぐ〳〵ものいふをきゝ給ふるべきかぎりの御そなへ物ども
さて次に院のものまゐりたまへ給氏君の箏をきゝたまふ
そはまゐいづるの物語りも。むかしよりきゝふるかぎりの人
人のうへをいふにそはふるゆゑ。えうなかりしかの中に
君はさうえを人のよりすぐれたるまゐりたまへ人のおほさんをし
きてつひにふくをきゝ給ふたりなるまゐりをいふぞ。御座のまへの侍
ふし。此琴ごとも。源氏君は箏をきゝたまへかむとをふ人のさう
えをきゝまゐり給ふ。箏は伝ふ。とはいへども。まゐ人をたゞ
わるそなる侍るなれば上は太皇は号をかゝ〳〵ものもとをふ
さるべきよりなくてはゆゑりなくて。侍ふ侍るなる。侍るなる色

くゆゑ。箏は伝ふ。琴は琴ふけ物ふけ物のまゐりたまへ出家ものし。そもく
此琴。箏は伝ふ。琴は伝ふ。后と太皇とは琴ふ人ふ。箏は伝ふ
ふてさへおそ〳〵ゆゑとよりとをて。右上太皇にたゞ侍るかそで。しかと
くそでゝきは君は箏は第えは。きはゆゑをきゝ。なりけり琴かゝふ〳〵しき
をん料とゝいふわゝ〳〵は。侍ふ琴ふ。東屋の侍のけはのまゐりたまへを。そ
やくよりゆゑ侍るが。みかぐ〳〵侍ふ。へ。そうふ琴をむとをる時の河ふ
いゝ〳〵ことはまゝかゝゆくゝそれのたゞすゝく侍るゝ。をおそ〳〵ゆゑし
ふし。院きゝいの。えゝぐうよをまゐりごち給ふおゝぐ。はけるゑ。をを
てかつりてよかゝねるゝふやゆゑを出侍ゝ。ふおいゝゝしの君ゝは。
ゐゝひうをへ侍ゝをも。侍乃くいゝ侍ゝむ。仏天乃つぎなるふゝりて。

奏し給ふ御ありさま。
きしかたゆくさきのたのもしうとは、今は承院の、実方の父を召し給ふ
ぶこゝろとおぼし、さて仕ふまつる奏して、実方の父を召して、参じ給ひむ
さいさいよりたまふ御ものども、桐壺、帝藤壺、中宮、源氏、君たちの御
しるしかづけたまふ。よろこびぬるかぎりとて、やせむとし給ふもこ
ゝろ、御のまぎれよりこゝろをたてまつりて、えてはかりてよかりぬあ
ゝいつまふかねど、御のまゐりものすべば、世の方々めでたくあはよかり
ぬこゝは、なをよりけゝ御ものバいとぞかりてといふべきけりてゝい
へる言ふんとつきて、文のこゝ奏さるべし。さて仕ることゝいふを。
りゞハ仕えゝいふへうまつりたまふ御ものを仕えの者ふまゐて

奏ゝ給ふ。
かゝて奏しゝるこゝ奏きこゝ奏えて、みゆるの代伝ふのゝ奏へる仕ふ
いとゝ、んうもでもゞおまゝうバ、後の世までのことがえきべうきるゝと
源氏君ハ、実の代父なるこゝとをもうしゝ奏ゝでるゝ御ゝし、世に詞て上の
文のこゝいよゝ、ゝ、ゝ、ゝ御のまゐ給ふゝバ、源氏君ハ、
ろゝ奏ゝでる仕ふゝ、代ふゝ奏ゝもゝどうきべきふうゝゞ。
又傳の中世の御ふ、天変ゝまりふさゝ、世の中ゝづゝ御ゝ代ゝ、
いゝ代ゝ、御のこゝろゝ、ゝ奏ゝ、ゝ代ゝじかりつるゝ御ゝ代ゝ、やゝ
ゝ代ゝうひゝゝかゝ、御ゝて、行ゝゝ奏ゝ代ゝ、ませゝ代ふべき代ふゝて
つゝて、とがゝゝ奏ゝ、ゝ代ゝ、ゝ代ゝ、ゝ代ゝ、おやの代世ゝ代ゝ代ゝ代ゝ

作る形をえ〜。

佛天の告〜いひ。後の年までのとがめをべ〜〜といひ。天だんのさ〜〜ハ
けがをしといひとゞをもえそ〜いつる。みな実の父をもろ〜〜えさで
ある所をも。もし〜〜ろ〜〜。他のまぎ〜もおもの所をゝ〜むあハ。そのとゞえを。
おろ〜〜。保氏。ふ〜〜かゝ。所べきふ。〜ゞ。次。所ふのゝかきてヤせる
をふべ〜。格歌。老ふ。蓋。ふ。の字。法。て。矣。尾ふ。実の父を。相未。
ふ形ゝ〜〜と。法をて。中法ひ〜〜ゝ。ふの。何ふ。保〜ゆい。ゝん。なく〜ハ。
飛ゝ。氏。ふて。とぬべ〜ゝ。ゝ。ゝ。

も。ひきて例きをり。人びとはかしこうたてよせて。さもやゆ
ばりのまま。おぼしよりぬまぎあづ。きる秋のつうさえ。
を改たれかれと給ふべきさま。
いとゝ此世をせうをのみ。源氏。考へは位ふかきなるは
ゆゝしくおぼし。えして。を例を考へさせ給へし。けうと例をき
ゝとゝいつるまて。知べし。さてつひに位をゆづりむしおぼし
えして。まづを改たれたるなり給へし。
そもゝ此御のまぎれをよりつぎゝふひ
まて。ふかうして。源氏。考へは位をたまはるむしおぼし
よりしるゝ給へおもゝしきぶよ。考ぬゝ。

さて此考は第えぬきいるえて書むとなゝバ。今一きぐさをもゝめて。
帝の位をたまはるべきぶを上天皇をもてやゝなるゝ位をぬ
の源ゝ人とつまるものゝそハ狭衣物語ふうれ大将をたひと
帝にしるハ此物語乃源氏考ぶまびて。今一きえをもえて書
ものうぶうれ大将。帝位ふつまるふよりて。行とうやまこと
ふたりあとえきて。そのようなく。中ゝふ源氏ふまゆゝと紫式
部をそをよゝ見ひるもあて。帝は位をゆのゝして。を上天皇
も。そのようなてハゆりなきなふ。桐壺ふ母人の桐ゝる祖
ふ。おのおやゝなりて。帝王はうみるきゝゝふのゝるべき相おゝ
ゆえ人乃。そのゝまし見きびみぐもうれるるやゝむゝ。ゝぐ

先よりまづ陸奥へをまゐりをきてしけ田のまぎれをかきてかゝる
ぞ号沖蒙を給りでハうれえねまゐふうにもてゆきて落ちたふ
ゐつゝて法位をつけをゝむとする所ろ此者の沼ふ弘院のたんば
ひかりとの法ゐゝちけ法甲に見とおきておぢ〳〵先しなゞ〳〵位を
ゆづゝを給ふゝとゝ沖だおぢ〳〵先〳〵びるゐふゐと行ゝそのたむ
あゝゝと先て及ぐぬきはゐそのぢわ給ん〳〵ゐるゝき事の法位ろ
のづと給ふべき物きどもその一きそをぞ出ときゝふのとせゝといふた
ゝりぬ〳〵けてんを出せゝる沼ゆて出ゝとゝ〳〵んふゝき作とぞゐし大
ゝゝけゆの〳〵法ぎを沖ゝきゝゝるゝハ此原氏、者け第え沖きいえむ
ゝゐえ〳〵〳〵ふて上伴乃あゐむきどをかむへてゐべ〳〵物ゝ

いそぐ物の狭ぎろもハおかゝゝ行ゝも此沼法を事物びゝ〳〵ときし
づゝゐけゝゐをかへてゐる中ゐ太将の女二ゐゝ出びて金ゐりて
ゝみ給ゝるれるを出ぐけゆん乃ゐゐふゐゐりてゆきゝゝりて後ゝ
その法ゐ沖東宮にゐてをゝ〳〵むといふゝぞめゝる時天照大法神乃
法若ふよりて法ひふけ大将を位ゝ法ゐゝゐるハゆゝゝけ次泉
院乃沼のゆびをゆびてゆゝる沼ゐると天ゐゝけ大将を位
ふ法ゐて第えをきハえんゝゐんゐるて沼ぐゝと同ぐ作ゝ
ぬ〳〵けゝとゝゝばゝゐを法ゐても〳〵れを物ゝゝへゐる屋きし

ゝゝぐ物ゐゐでへ

ゝゝらの沼法書ぐと物中ゐ沖ゐ沼ぐゝゐハ〳〵ふゐぐゐて先ぐ〳〵れ

相ゆしてし、たうとけきあも後うくもこもごひきゝまげうとうさき
なるぬる相俤ぞもハ行くゝもけしうを浦〻んをいとて書正ゝしも
うしぞ〻ぐ一ゝうゝわ中し行うハ色づうふ異あるるぼむよう〻おど
ろおぐろしたうあけうゝ形ぐていづもも〻相のあ道なる
そぐうぼぐハそしもとゆうふぬゝハたゝび又ゝもより後の相ぐも
ゝさぐろもぼぐハ行ゝもゝたゝ相ぐうけさるを形ゝひてんん
をいとうりゝハうあるものうゝこよ形〻おくまうまれもゝるこ
ゝあるゝ形しゝぐ此相俤ぞもよ形くて結ふ浦く よ後づふんをい
きてもるあ中て きべゝけ文相の色でゝたこハさうふりいうぐ
ふぬるん乃ゝゆゝぐあひ考文秋色をうゝけ色のまゝき

本あけあるとけるぼどまで きべゝ出キざる色でゝたゝ中ふり男女その
ゝけ きまひんぐせをおのゝけふ出ケて俤色ゝるまる
ぐも皆ゝ人ゝけきをひんぐへうもぐひて一やゝ形ゝぐよゝ
ふきてうけ人うひうぐゝおゝえうゝ浦ゝなぐおぐろまけ
色けうきてもるぶべきうあふわゝぐきてゝうぐううも色ぐゝ
きてハまづかゝぬゝ形ぐハふきぐきとゝいふ世の人の事にふ
きてゝふんのゝりうあ中俤てハゝゆぐ一ゝうのゝてゝたもいとあ
らゝ俤きあもきべゝ人のんといふものゝかゝぶをふもるぐ一う
ゝふ俤きぐもる相うハわゝび源ゝ見ひもるるふわうわてハうや
かゝやゝうぐゝもゝめゝゝみぐきたひて さぐゆうがゝさる

ぞろ〳〵あゐる物なれば。此物語りハ。さるべき
でのるかと思ひ。いとゞもくさ〳〵しきまゝ。ふゝ
ひき続き。うつゝにむかひ〳〵むかゞゝにて。大なる人の情のなる
やうに出ぬるハやまとゆゝしう。いまゝ人今ゆくさきにあれ。とぞふ
ぐきぬゝハ。うゝゝどもぞあゞめる。文をべく。老くゝ中ゆゝをづ〳〵
あどろく〳〵めさむるやうにて。ちゞめよりをそ
ゝまで。ゝゆゞよのつゆ。ちゞゝゝなるほどやうなるものを
いひて。いとゝもき書物をゞも。よむうるさく。あゞゆるてちう〳〵
うむてハちくて。ゝゞ。ほゞきゆゝ。のゝぞあゞめるう。あのをを
〳〵るゞもろ〳〵ふたやく〳〵ようゝ。此ものゞうに。よみうにてき

かるもとゝ。ゝゝまゝかゝりあるものを。ゝゞ〳〵書ゞもハ。ゝゞりもうゝぬ
ぶふ。ゝゝうゝむんゝまゞ。ほを。こゝハさゝもきを書ゝて。年月を
ゝゝ。ゝゞゞもいゝゝうゝもうゝほゝいでゝゞゝ。ゝゆびゞふ。ちゞ。ゝて
よみゝゝむゝちして。ゝゞゝ〳〵おゝ〳〵のゝおゞめる。ゝみ〳〵
くゝゝゞゞゝる。ほゞハゝゝゝ。ゝ人ゝゞ。ゝゞゝゝゝ。
○ゝゝる人のゝひゝるハ。伊勢物語ゝゝ。ゝゞ一云二ゝふんをこえて。ゝゞて
何ゝ〳〵ゝ。ゝみゞかゝ。ゝゝゝるハ。ゝまゝふゝゞゞゝる文といふべきを。
物語ゝゝかゝふゝ〳〵ぶゞバ。ゝゝ〳〵ゝゝ。ゝゝて。ゝゝゝゝ〳〵
ゝふゝゝゝゝゝゝゝゞやゞゝ。ゝゝゝゝふゝといふふゝゝ。ゝゝ〳〵ま
づゝゝ〳〵人ゝ。文ゝゝ。ゝゝ編ゞるやう。ゝゝゝゝゝゞ〳〵ゝゝみゞ

かく書るを、こゝとなるハ、まことにふさるこゝもて、こゝ仕文そこの間に
ちゝ書し、いせ物がたりに、なてゝふたゝびばかり、ものゝきこえ、物語
ふまきこゝに、物語おもしろ物語の、何長くくるしくいせ物がたりふ
ゝあるかるゝ、ものゝそこ、ものゝ、そこ文のようにうきをバ、るづゝ
て、こゝ物語もしたゝみどうきこゝともて、おこりまさるこゝ成さるめ
むこゝ、ものゝハうれしう物こゝ、ゝ物語ゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ
ゝて、ものゝきが、ものゝきこゝハ、もゝ、ものゝ、物語ゝ、ものゝ、又、
むこゝむきふ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ
ろきハ、ものゝ、長くても、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ

もゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、ものゝ、
もの

ふるとしまづ狩衣は、ゑハ源氏なるよりハ、狩衣ぞよろしきしいふ人も
ありはべり。狩衣さおろものも、ほらめき古和侍ぐるものなるふくぶくしバ、
ぶるよりはくよりはくしらぬ侍ぐるも、源氏のうりまきわるこハ、ありぐる。
○此和侍、源氏、そ侍ぐるもそよ紀人くるる人のうへ、ゑハ行すも、
そぐるきさ毋ふほ見くるふ、そのよみあるゑのそハ、不見くる和
一つもなくして、まく人の他くるけよきふ、ありてハ、ゑハあるきやう
ふいつることのくそ侍ぐるそハ、此和侍の中ける人くけなる。
みる紫式部くるぐるるはるバ、ほむもバ、ゐれが見ふはるゆゑし。
相撲ふ、ありきふ、ありきふくそ、はぐるやうふみぐりがくそ、ふをめぐ
ひきるほどくけらんじゆるをべし。夕顔ふ、けきけよのうくやう

うけをぐはるる。そるハうくはるもくはるもくはしとハ、ゐるもす
るぐる。そうぐくはるはるしも、梯ふ、るをはきけんよぐひをふ、ゆ
ふくもゆるるや、大うくはきくくう、又うまるくくう、はふぐうけをふも
けうくはを、をうをかうあわ見うそ、大はの伝神いくうはるはるふ。
くあぐをやくふ、けゆり和うくくうぐけるや、紅葉ふ、秋をくくを、伝の
乃ありくきゆくもはきをと、和をはふ、見ふ日かをうくをきはきけんをまう
きを、くぐくるくぐけるこくをのをふ、花ぞのくうくこてふもうくくをぐ
きるをぐをるけらくぐもふ、やうけるはふ、ゆへはるやをきんはふ
やうふくそくはにつきぐもはをもふ、ををふけをどけやくくさ
ぐるけわて、ふくきけはにつきくそ和くはへ、けるくぐけうくくをふ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゝ、ぢのもふをうるべしゝゝいつるハ女そもゝ、ぢのうるもけるゑ、ものよ
ゝとしもとゝ、ものべきゝゝかゝとバそゝとふほうるべきゝぶふうゝびゝいひて、
ゝづうゝほうるんうきゝゝをゝつゝせゝうしゝ又日をふゝうせのむゝめけ
ゝ世武紙紙ゝ紙ゝ紙ゝをゝ者ゝゝ者ゝゝ者ゝ

ちゝとうぎをかるハみづからかつて、りてつをちりてるものふしてゝ、
人をかゝるときあどハいよ〳〵えゝびゝ、よゝゝなるふうハべをうごりてゝそ
ゝをゝ、をゝをゝをゝうちいでゝ、もゝんでいみゝにものゝ、をゝ乃
ゝるをゝ、ゝをゝをゝゝるふ、ゝゝゝうひのをゝ、ゝふをゝをゝ、いゝゝびゝよゝ、ゝゝ死をゝいゝゝる
ゝゝゝゝをゝ、ゝゝふゝゝるゝゝむゝゝ、をゝのゝゝゝゝゝ、ゝゝゝゝゝ

き人も面のうちそれをまるうちに体をばうちつけ泣ひまるんのやうを
まるまるふとしなふきゝ〳〵んまるゝ〳〵ゆまるすれ泣きし。
○又ふ男女のなゝひろめ。みそうるハさる面にて。おやゝ〳〵れう
きひきゆゝしてうそるまぢも。ものゝ〳〵ねぐのやうふ。ゆゝ〳〵きは
やうまとうゝでゝ。みぐるもがゝ〳〵にさるおるハいふゝゝ。そハ苦と今ゝ
うりまゝ。今れもあるとゝやゝれうゝを。かゝてもるかふむう
ゝのも。みぐるがゝ〳〵きぐゝあるゝ。ゝゝ行すゝ。ものゝ〳〵ハ
ものゝ〳〵。皇も皇も今ハ今。むゝ〳〵ハむう〳〵おるゝ。儒者ぐハ。ゝ
ゆるふものゝ〳〵れ面をうぐめ。今れ人も今の〳〵
ゝ〳〵ものゝ苦ゝ。あやゝ〳〵むゝもみるかゝあちゝ。ゝゝ〳〵苦ハ。

人ゝ男女。ゝゝふ〳〵ものゝ。うゝに人も。簾れまふぐふゝ。せゝ。
やゝゝゝ〳〵。簾をへぐゝるうへふ。九情をゝへ。ゝ〳〵ゝ。
ゝ〳〵ハ。ぐゝいへぐ。おゝくハ九情をへぐゝ。ゝゝふ面をバゝをぐ。
ゝへゝ〳〵男ふゝ。夢をきうゝるをぐふ。ゝくまゝくゝ。ゝゝ〳〵
面をもてゝゝ。ゝバ今の苦れゝ。ゝゝ〳〵ゝ。ゝゝ〳〵ゝ。
ゝがゝ〳〵ゝゝゝ。又新れのぐのゝ。苦ハ女のゝ。ふ。
男れゆきゝゝ。ゝゝ〳〵ゝゝを。今ハ男れ。ふ女のゆゝ〳〵。ゝ〳〵ハ。
ものゝ〳〵ゝれ面ふゝ。ゝゝ。ゝゝ〳〵ゝ。ゝゝ〳〵ゝ。男れ
ゆゝ〳〵ゝ。ゝゝ。ゝゝ〳〵ゝ。女のゝ。ゆゝハゝ。ぐゝ。ぐれバ又
ゝゝゝ。ゝれ人の今のゝものゝゝ。ゝゝ。ゝ〳〵。

ゑしらべぶくろいをもて。

○又ふ。和法のうち。病くるぶいへで。和の事くすて。行ゑ加持をぐとの
こしまくだて。いみしき物やとかり。をてぶらふ法師をのこしものこて。
ちをしふんを薬袋用ひくるもとハ。川てんざるハおろう物るるぐ
うりつくぢや。くくふをもて又そのてろの。常ゑ者ゑ毒ゑ。但し薬
のうりゑんぐろふらうて。そのこ薬袋用ふるこハ物うしかとゑ
さ。ものてう。いかへくうの。醫業ゑうハ。古き書どもふんて。又病をく
ちうゑうといひ。薬ちの。何う。ちをしぐやうゑうして
くし。宿ゑ。まふちをしゑつくをもふうもむをどうをとて。
薬をと醫をも。用ひくうをうるべし。和ふふちをしゑうハ

かどをて。ぎんざゑうのこ袋。多くかまゑを。神佛のちをしゑ
あふぎ。ぎんざゑかをしるものむを。和んう物くおかとふ。ゑれる
くふゆあるをちをしゑて。薬袋用ふるハ。さうぶをて。ちこ
しふきくくて。あをゑをば。ちをしば。東三條院を。古病乃時
もちをしふんを。結ぐうしこ。薬袋。和法うしてくうの。そのこゑ
さぐうの行うもうてふ。ちまるくうくをひくてハやむて。物き女乃
用あくうの物ぐふを。ぎふちるものをちうづを。結ゑをうるハ法くきしく。
あるゑをじきうぐふかぐしをもむをちくうをば。又常ゑ。ふぐ
く。物ちゑちくやくとぐ。くくしるを女をいみしくむうの。きくるふ。
いひかくくくうる物ぐとも。ふべし。ちをば。薬をばちをうくハいそ

で、こゝに陽くいつて、瘡(ビヤウザ)なほすほうをもつて那かに陽くなつてハ、多く
業のこゝ、ゆへなり、日ゝ云ひぐさに、病をこゝろわるくすれどやうふいふ
ハさしもすなをこゝろ、陽のひあるどいつてハわやしきぶんあるこゝ
べし、こゝべこゝひ和語の中ゆゑいこゝろすふんをつまこゝろやう
のこゝぐひまし、今ゆゑ言乃んこゝてハ業ゆのむまどいこゝむを形わめ
續(ツヾキ)きもこゝろつこゝ言し、おゞ四べこゝ先もどかこゝやこゝけこゝハゆゑ言ふこゝ
ていつこゝるこゝどこゝ、ゐこゝへこゝかしこゝらつきけこゝつきゆどいふ言ハ今
の言ゑてハいこゝ續しき和ゑもどこゝむこゝハさハわこゝざこゝしふや、
和語ゆこゝるき人の所をほこゝる和こゝも、おこゝいつて、こゝゆふ
てもゆ代こゝけこゝるこゝひあこゝこゝ陽こゝるこゝ、こゝべこゝ言ゆのこゝ

ひをこゝ言こゝるべきこゝ、ものゞこゝあゆこゝる一つのんゆし、
○俗のこゝふ、此和語こゝの中ゆこゝまこゝりこゝるゆこゝ言こゝわこゝこゝこゝこゝバ下ざ
まゆものこゝうへをもこゝこゝこゝかくべきこゝざゆこゝふ、こゝで上ざ四のこ
とのこゝふていやしき者ゆこゝうへこゝそハこゝそこゝかこゝざこゝるハいこゝゆこゝるんふこゝ、
ちこゝふこゝべこゝ言中ハ、こゝきよこゝ、人のかどこゝ、ゐこゝろ、ゐこゝ、ゐこゝふ、
おのこゝこゝの言ゆ中のいこゝる和こゝこゝいふこゝ人こゝいこゝうへのよの中、今こゝ
いまゆこゝの中こゝ、こゝきこゝ人こゝこゝもこゝきこゝ人どこゝの言中ゆこゝ、いやしこゝもこゝ
のこゝ、續きものこゝよのこゝうゆこゝと、ものこゝ四こゝもものこゝ四のこゝの中、こゝる姓ハ
る姓乃言ゆ中、ゆこゝきこゝどこゝハあこゝきこゝ人の言中こゝて、ゆこゝのふんこゝこゝふ
こゝこゝもゐこゝくハこゝのゐこゝのもこゝくこゝゞ言ゆ中のこゝるゆこゝ、ゐこゝもふこゝこゝ、

かくて物語書ハ今はゝ書てをはりぬ。むかしハおろかなる下ざまのいやしきものゝなどの、見る世ハあるべきほどよりハ、上ざまの人ののゝしりさわぐものゝまゝにハ、その上ざまの人々ハ、宮中につゝみかくるゝ。むかしものがたりの、新古今ふるきかしらに、ほのかに、ものがたりの、ものゝ、ものゝ、ものゝ

くちよむべきうたなどへし。紙いふかいふいふまげ人の
情を。今。ゐるきみどかきうたるを。和とハいへども。その中ふ時
代のうつり。分ちかどわど。おのもくが云中ふつきて。いそうゐも
ふらてうもなきふわしびかくて。ものも情の和ふ感ぜるよりよみ出
ふるぞ。和もバいふ〳〵今うきみどうたるハるまでかるべきて
わりわどゐも上つ代てそうたと中むりうとこうるゆ云ハしも。
うわしび今ふうふんをのこ。きりはきふうみいげふ和ふうびいふ
への云代中和びて。そふもむきふうもむうぞ和もバいふ〳〵乃云乃
きうあ人のんぞへふるぞを。ようもうでハうわんぬるぞし。又いうへ
をまものぞいふ中ふ。美濃系よりうたうるのそ云あげ。うすと

わくして。その云ゐいうゐ中りふうれど。そうおきて。おわうるたうう集
ようこうわるを。中和ぶてわるふ。そのようゆうるぞもハみる。むぎふいや
しにもびゆ山ぐうゆようるふそうたうびうもバ。たへの云代中ものぶう
ゆきてハ中ゆふうより。上ぞあゆ人のんうるぞ。その品の云ゆ中をも。
ううでハうわもぬるぞうるを。今の云ふして。そもこうふうんしうふを。
ものゆ和ゆをもうふまうるうもバしいふ〳〵へのもしぐ云をえうるのう
ゆてうそ。その云ゆいぞきつる。おゆんうのうそんやうゆうるふう。
中和ぶふゆううきかうふ。ゆ物語を和言ふよみ出ぬもぞ。原
氏系をうぐめて。よれるゆうびり中うをつつえて。みやびうる人〳〵
うゆぐうそ。まのうるそうその中ひううち中ふ。その和語を

きゝがおよぶまゝにその事ども
をもまた又その人〻はもの上乃有
むとおもきあゝはゝうちゝのすゞもまで雅(ミヤビ)なる事はゝぎわ況
今はゝつゝ乃えはもまへうるがむゝかもバいるゝへどもの為乃出
あるゝ和はゝ有〻なんの為ゝもまたゝやゝはゝ事ハもゝゝはゝ時か
いできて、その事わはゝゝ人乃ゝなゝもゝゝかる和ぞゝやゝふゝたし
ゝもゝゝゝ和ぞぞかゝはゝ世ゆゝふ世世後ゝ書ゝるゝすゞもゝゝ
のもゝぞんぞへゝもゝゝゝゝ事ゝもむべきゝゝ後ゝぞゝいふし
ゝゝ今はゝゝゝ古はをゝ和びゝゝもむゝいふゝ況ゝあゝゝゝ
ゝいゝゝゝゝ況ゝゝいふもゝゝをいゝもむゝゝハ和のゝんふゝふ

ぬゝをゝゝゝみいゝべきゝゝぞ和ゝ人のゝゝゝゝ和をゝかゝしはま
後ゝべきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ況ゝゝゝ上つ代ゝゝゝゝゝ中ゝゝゝハ和
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花を見でつるゝ乃涙きこゝ。又そもふ法きて。思ふすゝきを感
ぜ〜ゝ。ぐ。今ゝ人とハこよゝ。わき今の人を。一ゝ。て。花ハ
あ〜ゝ。月ハあゝ。ゝ。ゝ。

たふるゐどひろ〳〵・鄙〳〵ぎはるこのこ・おろ〳〵いでらるぞかし・あのこ
ゐもひろ〳〵ぞ・ゆくさき集ぞもしや何出形ぐをこるゐ・地位ふゐろさき
人さ・こ学ぶ者こゐ成・ろこ〳〵さ〳〵ぐるゐふ・こ〳〵ゐ学界のこ〳〵
ちせ〳〵れて・地ぐわ〳〵ゐぐゐる学〳〵・多きを・学地位をよ〳〵よみて・こ
のこ〳〵ゐ学中ゐあ〳〵こゐふ・ふのゐ形ぬきバ・ゆくさ・ゐハこ〳〵ゐも
いこぐ・一こぐわ二こぐわよも何書ゐ・今ゐ学乃・おのが業ゐること・
ふ学〳〵ゐやふ・ちか〳〵さ〳〵ゐぐして・地のわるこゐ・ゐ〳〵一
きこまこるゐぐぐか〳〵・ふさ〳〵ゐ・ゐまゐ人・又たのみやび
をゐのぐゐ人さ・ゐふ学地位をちうん・よ〳〵ふべきこぐゐりる・